

(十一) 弓雄きつを

「お姉さま、お聞きになりました。」

弓削が亡くなってからもう一年近く。時鳥の鳴く季節になっても、氷高は宮に閉じ籠ってばかりいる。

(皇子様が亡くなられたのは私のせいだ。私が妻にならなければ、狙われることもなかったろうに。)

そう思うと鬱々として夜も眠れない。そんな氷高を慰めようと、時折吉備がやってきて他愛のないおしゃべりをしていく。

「明日香叔母様の葬儀で詠んだ歌、佐留が作ったのですって。」

「まあ、久し振りですこと。ずいぶん長い間、佐留の歌を聞かなかったように思いますが、どうしていたのでしょうかね。」

「佐留ももう年だから、お義兄様が亡くなられてがっかりして歌を詠む元気もなくなつたのかと思っていましたの。それが、とんでもない。元気で、歌も全然衰えていなかつたそうですよ。それどころか相変わらず艶があつて、恋歌のような挽歌だつたのですって。もう、お義兄様のご無念を忘れてしまつたのかしら。」

吉備が憤慨してみせる。

「それにね、佐留が恋をしているという噂もあるそうですよ。」

「まあ、だって、佐留はもう五十を過ぎていてでしょう。」

「噂ですよ。まさか、ね。」

「でも、詩人は死ぬまで恋をするとも言いますから、佐留ならわかりませんよ。」

暗い話ばかりである。たまには年寄りの恋も面白い。

佐留も年をとつた。弓削の最期に何の力にもなれなかつた悔しさが、佐留の心を空しいものになっている。そんな佐留の心の空白を若い広売は身をもつて慰めようとする。赤子の傷を舐める母親のように、広売はゆっくりゆっくりと佐留の心の傷を包み込んでいく。権力の駆け引きとは全く無縁の優しさが、揺り籠のように心地よく詩人の魂を揺さぶる。

広売から若い命を与えられたかのように、やがて詩人の心は再び蘇つた。翌年の初夏、長年親しく出入りした忍壁の妻明日香皇女が亡くなった時は、忍壁のたつての願いで挽歌を作つた。自ら立って歌うことこそなかつたが、その衰えを知らない艶やかな挽歌、まるで相聞歌のようなあでやかな挽歌に、参列者は一様にうなつた。

「衰えんなあ、あの男は。」

「まるで恋をしているようだ。」

「あの年で恋か。」

「詩人の心はいつまでも若いものだ。」

誰も本当に佐留が恋をしているなんて思いもしない。誰も知らない秘め事に、佐留の心は年甲斐もなくわくわくと踊る。広売が身ごもったことを知ると、居ても立っても居られない。若い広売が愛おしい。毎日でも行ってやりたい。だが、余りしよっちゅう行ったのでは、人に知られてしまう。この年ではそれも恥ずかしい。そのうちゆっくり会えるだろう。だが、佐留の若さもそこまでだった。

知らせに驚いて佐留が駆けつけた時、若い妻は赤子を生んで死んだ後だった。どうしてもっと来てやらなかったのか。どうしてもっと側にいてやらなかったのか。どんなにか辛かったろうに。佐留が泣くと、赤子も泣く。

「おお、そうか。お前も母が恋しいか。」

抱き上げてはみるが、いったん泣き出した赤子は一向に泣き止まない。赤子を抱いたまま部屋の中をうろろうろするが、赤子はますます火のついたように泣き続けるばかり。見かねた乳母に赤子を預けると、佐留は一人部屋の中に座り続けた。昼は昼で心寂しく日を過ごし、夜は夜で溜め息をついて夜を明かす。

悲しくてどうしようもなくなると広売がいつも出かけていた軽の市を歩いてみる。だがいくら待っても広売に似た人は現われない。

「ひ、ろ、めーっ。」

声に出して呼んでみるが、答は返って来ない。とぼとぼと家に戻ると、広売と寝た夜殿の木枕が、そっぽを向いている。胸が張り裂けそうになって、佐留は突っ伏して泣いた。

佐留はこの悲しみを挽歌に込めた。その反歌の一つ。

巻向の山辺とよみて行く水の

水沫のごとし世の人われは

(1269)

親しい人が次から次へと去って行く。恋に泣き、権力に酔った人々も、皆同じように去って行く。これが世の常というものか。それにしても何と悲しい定めであることか。自分もこの先どうなるのか。

佐留の恋、若い妻の死は、その長い長い挽歌と共にすぐに都中の噂になった。噂は菟野の耳にも聞こえてくる。

(まだ生きていたのか。)

佐留を連れて歩いたのは、遠い昔のような気がする。

(もう良い年になっているのであるうに。いつまでも元気なことよ。)

笑うべきか呆れるべきか。佐留は菟野よりも少し年上のはず。年下の自分が『死』を考えているのに、あの男はまだ『恋』をしているという。

(それにしても何と悲しい歌か。それに、何と巧みな歌か。やはりこれがあの男の身上だ。あの男に神の歌を歌わせたのがそもその間違いだった。)

肩の荷を降ろしてしまったからか、仏にすがる心地よさを覚えたからか、菟野はすっかり丸くなってしまった。今の菟野には佐留の歌も素直に胸に響いてくる。

『水沫の如し』か。そうかもしれないぬ。」

『水沫』というには余りにも多くのことがあり過ぎた。それでもやはり後の世から見れば菟野もまた『水沫』の一つに過ぎぬのかも知れぬ。やるだけのことではやったという満足感を抱いて、菟野は心静かに最期の時を迎えるはずであった。

「命あるものは必ず死す」

道照どうしょう和尚わしやうが言っていた。その道照が死んで、遺言通り火葬にされたのは、

つい一月前である。人は死んでも魂は永遠に滅びない。これまでそう信じてきたからこそ、いつでも魂が戻ってこられるようにと遺体はそのまま丁寧に棺に入れて葬られてきた。そんな中での道照の火葬は衝撃的であった。いつか香具山で見た腐乱した死骸が、菟野の脳裏に住みついて離れない。

「そうだ。火葬だ。」

火葬にすれば醜い死骸をさらさずともすむではないか。火はあらゆる穢れを清めてくれるだろう。そして、火葬の煙と共に、魂は迷うことなく天に昇っていくことができるだろう。

自ら神となった菟野は、自分で神を信じることはできない。その分、何かにすがらずには居られない。菟野の心は急速に仏に傾いていった。

好むと好まざるとに関らず「死」と向き合わざるを得ない老人とは違って、平和な代の若者たちは「死」を忘れていく。

この年の夏には、肥後国でわずかに命脈を保っていた倭国の民が倭王の遺児薩末比賣を奉じて蜂起したが、筑紫総領に掃討され、ついに倭国はほぼ完全に滅んだ。都の若者たちの中には、倭国の存在などもう知らないものも多い。しかし倭国を滅ぼしたことは、軽に大きな自信を与えた。

その軽の耳に弓削の恋を吹き込んだのは誰だったのか。あれ以来、いまだに軽は紀の宮に足を運ぶことを避けている。紀は一人悶々と日を過ごす。

日高に教えられるまでもなく、阿閉には紀の憂鬱がわかっている。阿閉にとっても、軽はいつの間にか手の届かない存在になっている。このまま放つては置けない。これは自分の役目だ。阿閉は三千代を呼んだ。

「大王は宮子をご寵愛と聞きましたが。」

三千代は恐縮するように、眼を伏せる。麝香じきやうであろうか、年に似合わぬ若々しい衣がかすかに隠微な残り香を放っている。

「恐れ入ります。有り難いことに、なぜかお気に召して頂けましたようでございます。」

「そなたが宮子をご寵愛なさるように仕向けていると申す者もいるように聞

きますが。」

「滅相もございません。そのようなことは断じて。」

「では、後の許へもお越しになるようにお勧め申し上げます。」

「私も申し上げてはおりますが。ただ。夜殿のお相手が、その、何でございましょうか、お后様では詰まらぬと仰せて。」

三千代の妙に意味ありげな艶っぽい笑みが、阿閉を苛立たせた。夜殿でぬるぬると軽に絡みつく蛇を見る思いがする。鳥肌が立った。

朝の挨拶に来た軽にも、さりげなく尋ねた。

「お上はおいくつになられました。」

「十八でございます。」

「立派なおなりですこと。十八にもなればもうお子ができても良い頃でございますね。たくさん妻をお持ちのようですが、あまりお渡りにはならないのですか。」

「女人の相手は疲れます。」

「まあ、これは。私も女人の一人です。さぞお疲れでございましょう。」

「いえ。とんでもありません。母上は別です。」

軽は慌てた。目の前の軽は昔の頃と変わらない。ほっとした。

「まあ、母は女人のうちにも入れてもらえませぬか。それもよいでしょう。でも、女人はお気に召さなくても、お子はあげねばなりません。お上のおじい様浄御原宮大王は外戚が権力を持つことを嫌われて皇族同士の結婚を勧められました。お上は県犬養夫人がお気に召しておられるようですが、先ず后に日継をあげてもらわねば世が乱れます。くれぐれも后をないがしろにはなさいませぬように。」

軽は不快気に眉を寄せる。

「后は嘘つきです。弓削と通じたのです。」

「三千代がそう言ったのですか。」

「三千代だけではありません。」

「后はそのようなふしだらな女ではありません。お上ももう立派なおなりなのですから、しばらく三千代を里に下げて、ご自身の眼で周りをご覧になるとよろしいでしょう。」

軽は返事をしない。気まずい沈黙が流れた。

やがて三千代と宮子が姿を消し、軽も時々は紀の宮にも足を運ぶようになった。

愛欲と権力欲の渦巻く中、朝廷は近江朝の流れを汲む文官を中心に、急速に唐文化に傾斜していった。近江朝以来途絶えていた遣唐使の発遣も発表された。もはや政治を支えるのは祭祀さいしでもなければ武力でもない。唐ならに倣ならって制定されつつある律令が、生活の全てを支配しようとしている。だが、それに気付いているものは少ない。勿論律令は作る側、支配する側に都合よく作

られている。

年が明けると藤原不比等らによって手直しされた大宝令が施行された。

この時から、大王は天皇と呼ばれ、皇子は親王と呼ばれるようになった。続けて新しい位階と官職が与えられた。ここでもまた、安麻呂を始めとして大伴氏一族が悔し涙を飲んだのは言うまでもない。

この時佐留も従四位下を与えられたが、そこにはもう華やかな宮廷歌人『人麻呂』の姿はなかった。権力者のために歌を詠むことは辞めた。佐留が心を動かされるのは権力に敗れた悲しみ、恨みの死である。大宝令の施行に伴って、風紀の乱れも厳しく取り締まられた。これまで比較的自由だった宮中の空気も一変した。避暑を兼ねた菟野の久々の吉野行幸でも、恋愛の発覚した出雲の采女が宮滝に身を投げて死んだ。かつて数々の恋を歌った歌人は、今や悲恋の死に心を震わせる。

山の際ゆ出雲の児らは霧なれや

吉野の山の峰にたなびく (429)

八雲さす出雲の子らが黒髪は

吉野の川の沖になづさふ (430)

道照の火葬以来大倭では火葬が急速に広まっていた。吉野の山にたなびく火葬の煙は、弓削の見た「常にあらむ」雲を思わせた。その「雲」を名に帯びた出雲娘子の黒髪が宮滝の水に浮かぶ様は、歌人の目にも強烈に焼きついた。だが、いまだ神ならぬ身の佐留に、どうして娘子の水に漂う姿と、後の我が身の姿とを重ね合わせることができようか。

秋の紀伊行幸にも佐留は進んで従駕したが、もはや菟野から声がかかることはない。

「いこだ。」

同行の刑部垂麿が目配せする。国境の山陰の何の変哲もない坂の上。

「こんな所で。」

行列を先にやると幣を手向けて祈った。川島の無念を思うと涙が止まらない。佐留が尋ねる。

「その狩人の姿を見たのか。」

「いや、弓の先が見えただけだ。だがあれは流れ矢などではない。明らかに皇子様を狙って待ち伏せしていたのだ。」

怒りと悲しみが綯い交ぜになって、二人は長い間坂の上に佇んでいた。

紀の国の昔弓雄の響矢用ち

鹿獲り靡けし坂の上へにそある (1678)

この時から佐留の歌仲間の間では「弓雄」は特別の意味を持って使われるようになる。

「ずいぶん遅れてしまいましたね。遅れついでに磐代の丘へ行ってみませんか。」

垂暦の提案でその夜は坂の下の窪地で休んで、翌日磐代の丘を訪ねた。松は何事もなかったかのように海を見ている。だが、老婆の姿はそこにはもうない。潰れた小屋らしきものが半ば砂に埋もれている。

二人は、有間の結び松を見て川島を思い、弓削の死に涙するばかりだった。

後見むと君が結べる磐代の

子松が末をまた見けむかも (146)

美しい和歌浦の景色を見ても、思い出すのは広売のことばかり。もはや佐留には後ろを振り返ることしかできない。

黄葉の過ぎにし子等と携はり

遊びし磯を見れば悲しも (1796)

潮気立つ荒磯にはあれど

行く水の過ぎにし妹が形見とそ来し (1797)

古いにしへに妹とわが見し

ぬばたまの黒牛瀉くろうしがたを見ればさぶしも (1798)

玉津島磯いその浦廻うらみの真砂まなじにも

にほひて行かな妹が触れけむ (1799)

紀伊行幸から戻って、しばらく姿を見せなかった具大養三千代が現れた時、宮中は大騒ぎになった。中でも一番衝撃を受けたのは菟野ではなかったか。三千代は養女である夫人宮子が生んだ男児をその豊かな胸に抱き、自分が生んだ女兒を侍女に抱かせて、威風堂々と辺りを払って乗り込んできたのである。なぜか宮子はまだ姿を見せない。その宮子は養母の具大養氏を名乗って

はいるが、実は不比等が鴨氏の娘に生ませた子だということか、侍女の腕の中で眠っている女兒もまた、不比等の子であると。

菟野の顔から血の気が引いた。倒れそうになるのを必死でこらえた。

「そなた、いつから不比等と。」

滅多に顔色を変えない菟野の動揺を楽しむかのように、三千代は目を細めた。

「さあ、いつ頃でございましたか。まだ都が移る前だったと存じますが。」

そんなに前から。何も知らなかった。菟野は後頭部を打ちのめされる思いがした。

「でも、あの頃、そなたには三野王が通っていたのではないか。」

「ほほほほ。三野に見つからないかとはらはらいたしました。」

「ああ。不比等が三野王みののおおきみを筑紫率つくしのそつに推挙すいきよしたのは、そのためであったか。」

三千代は悪びれることもなく、妙に艶っぽい笑顔を見せた。年に似合わぬその色香に、菟野は顔をそむけた。

(だまされていた。)

三千代と不比等が通じていたとは。菟野は不比等の小太りで丸い顔にたたえた笑みを思い浮かべて唇を噛んだ。不比等の熱のこもった視線に、暖かい心地よさを抱いていた自分が忌々しい。あの従順で人の良さそうな笑みの下で、

何を企んでいたのか。二人が宮中で親しげな素振りそぶすら見せなかったのは、

一体何のためか。

「軽皇子様のおためです。」

草壁いとしさ、軽いとしさの一心で、三千代の口車に乗せられてきた。その三千代が不比等と一心同体だったとは。何のことはない。軽のためではなく

て、自分たちのためだったのだ。忠義面ちゅうぎめんの裏に隠された狙いねらは何か。

「大王はこのことをご存知なのか。」

「もちろん、お上には逐一報告申し上げております。」

三千代は勝ち誇ったように胸を反らせた。

軽からは何も聞いてはいなかった。軽はいつの間にか仮面を被った不比等と三千代に奪われてしまっていたのだ。自分のものだと思っていた孫が、実はもう手の届かないところに行ってしまったことによく気づいた。気づいた時はもう遅かった。菟野の体力はもはや限界に近づいていた。

やむにやまれぬ思いで、菟野は三河に旅立った。一見穏やかな菟野の表情は、気楽な物見遊山の旅を楽しんでいるようにも見えた。だが、菟野にとつては、三十年前夫と共に歩んだ道をたどり、壬申の乱を支えた東国の民を顕彰して、夫の目指したものをもう一度確認するための旅だった。いざという時には東国の兵を確保しておかねばならぬという決意をも秘めていた。

菟野の必死の覚悟に気づいていたのは、ごくわずかの側近だけである。この時の緊張感を従駕した結子が都に残った長皇子に秘かに歌で伝えてきた。

大夫の得物矢手挿み立ち向かひ

射る円方は見るに清潔けし

(61)

旅を終えた時、菟野は力尽きた。枕元に呼ばれたのは阿閉と氷高、それに御名部と吉備の四人。全てを女たちに託して、菟野はその戦いの生涯を閉じた。享年五十八歳。

「おばあ様は馬鹿ですわ。お兄様を可愛い可愛いと言っているうちに大王家を不比等に乗っ取られてしまったではありませんか。」

吉備の批評は手厳しい。だが、氷高には祖母の気持ちもわかるような気がする。

「そんな言い方をしてはおばあ様がお気の毒ですわ。孫に位を譲りたいと思われるのは当然です。」

「あら。お姉様と私だって孫ですわ。」

「でも、女ですもの。」

「おばあ様だって、ひいおばあ様だって、女ですわ。」

「これまでの女大王は皆お后として朝政を聴かれた方ばかりですよ。」

「だったら、いったん弓削義兄様に位をお譲りになって、その後でお姉様が継がれば良かったのですよ。それなのにおばあ様はお義兄様を見殺しになさったわ。あれもきつと不比等が仕組んだことですよ。」

「もう、おやめなさい。今さらとやかく言っても始まりません。」

御名部が割って入る。

「それより、これからどうしたらよいのかを考えなくては。」

やつと自分の出番が回ってきたのを感じているのであるうか、御名部は心なしか、生き生きとして見える。

吉備の主張は単純明快である。

「不比等が国に乗っ取ろうとしているのは明らかですわ。不比等を捕まえましょうよ。」

氷高の方が現実をよく把握している。

「誰が捕まえるの。そんなことができるくらいなら、とっくにおばあ様がなさっていらつしやいますよ。」

御名部も高市の死以来、国政の動きを注視してきた。

「そうですとも。『令』の規定で全ての権力は太政官に移されてしまっていますよ。兵士を動かすのも太政官の仕事です。大王といえども『令』に縛られて好きなようにはできないのですよ。」

「あら、それでは大王なんて、ただのお飾りではありませんか。」

「そう。それに、その太政官も、大伴御行は死んだし、阿倍御主人と石上麻呂はもう年だし、今では不比等の思いのままです。とても不比等を捉えるなんてことはできませんよ。」

「不比等に手を付けられないのでしたら、太政官の中で不比等に対抗できる勢力を育てなければ。」

御名部は少しづつ議論を自分のほうへ引っ張ってくる。

「今から育てるなんて悠長なことをしていたのでは間に合いませんわ。」

「不比等がここまでのし上がって来るには、長い年月と綿密な計略があったはずです。一朝一夕には抑える^{おさ}なんてできませんよ。」

黙って聞いていた阿閉が、初めて口を開いた。

「先ず、長屋に位を与えねばなりませんね。」

御名部と吉備の顔がほころぶ。太政大臣高市の長男でありながら、長屋は二十八歳の今もまだ無位無官に捨て置かれている。

「有り難うございます。亡くなりました高市もきつと喜ぶことでもございましょう。でも、それより三輪高市麻呂の復帰が先でしょう。不比等は古い神々を追い払って、自分に都合のよい神を祀ろうとしているのです。これまでの神々を守るには高市麻呂が必要です。」

かつて菟野の伊勢行幸に諫言辞職した高市麻呂は、この春復帰はしたものの遠く長門国に追いやられている。

「そうそう、忘れていました。高市麻呂を都へ呼び戻しましょう。」

これまで政治に口出ししないようになってきた阿閉だが、菟野亡き今、不比等を抑えられるものは阿閉しかいない。このまま息子を盗られたままで居られようか。阿閉も腹をくくらざるを得ない。だが阿閉としてはあくまでも表に立つことは避けたい。太政大臣を置いて代わりを務めさせよう。草壁の兄弟の中で、今では忍壁が最年長である。菟野の臨終に立ち会ったのは四人の女だけである。菟野の名を使えば軽も反対できないだろう。

「太政^{おおきすめらみ}天皇のご遺言です。忍壁親王が太政大臣となって、天皇を補佐し奉りますようにとのことでした。」

軽は反対する。おそらく不比等が言わせているのだろう。

「太政大臣は天皇が女人の時などに臨時に置くものです。私は自分で朝政を聴くつもりです。太政大臣など置くつもりはありません。」

新しい律令の下で政治は順調に滑り出している。軽は自分に自信を持ち始めている。

（そのうち遣唐使も帰ってくるだろう。若者の力で新しい政治をやるのだ。今さら年寄りの出る幕ではない。）

口こそ出さないが、軽の目が阿閉の介入を拒否している。不比等や三千代におだて上げられているのだろう。おそらく軽は、自分のやっていることが不比等の受け売りだということに気づいてはいないに違いない。

「でも、ご遺言ですから。」

珍しく阿閉も譲らない。結局「知太政官事」という新しい官職を作ること

手を打った。太政大臣のような権限はないが、忍壁を前面に押し出すことで阿閉は裏から人事に口出しできるようになった。早速、長門へ追いやられていた高市麻呂を呼び寄せて左京大夫に任じた。また、長らく臥せていた阿倍御主人あべのみうしが死ぬと後任の右大臣には石上麻呂を昇進させた。同時に無位の長屋にも一気に正四位上の位を与えた。

不比等にはこの一連の人事の陰に居る阿閉の姿が見えていない。忍壁の後ろに居るのは穂積か、長か、舍人か。いずれにせよ天皇位を狙う親王であろう。成り上がりの藤原氏を快く思っていない大倭の古い豪族共が後押ししているに違いない。

「黙って書でも読んでいけばよいものを。」
天孫といえども邪魔者は追い払われねばならない。かつて須佐の男が高天原を追われたように。

追い払うのは伊太智の仕事だ。不比等は伊太智を呼んだ。口では「奴」と言っているが、不比等は伊太智を奴扱いはしていない。伊太智の父は近江朝の皇子であった。不比等の姉の許に通っていた時に、館やかたの婢はしために手をつけて、生まれたのが伊太智である。婢の生んだ子供は奴婢にされる決まりである。父が生きていれば伊太智も皇子になれたかもしれない。だが、伊太智が生まれる前に父が死んだ。伊太智は決まりどおり奴の焼印を押された。不比等は伊太智の不満を煽り立てる。

不比等の部屋から怒声が漏れる。やがて扉を蹴って飛び出してきた伊太智は庭に降り立つと荒々しく歩き出した。池の周りをぐるぐると回る。かすかに梢を渡るそよ風が、少しずつ伊太智の苛立ちを運び去って行く。怒りの後には悲しみがやって来る。いつもこうだ。池の端の石の亀に腰を下ろすと、そのまま水面を見つめた。真夏の太陽を反射してギラギラ輝いていた水面が少しずつ光を失い、やがて暗闇の中に沈んでも、まだ動かない。夜の帳とばしの中で伊太智もまた石になった。

知太政官事の職に居ること二年余。忍壁もまた、帰らぬ人となった。まだ四十前の若さであった。伊太智の姿はいつの間にか不比等の館から消えている。

それでも阿閉はあくまでも表にでない。

「知太政官事は太政天皇のご遺言で作られたものです。空官にはしませんように。」

軽も菟野の遺言には弱い。やがて穂積が知太政官事に任命された。押ししたり押されたり、両者の駆け引きは果てしなく続く。